特集2　川崎市市民ミュージアムの救援活動報告

令和元年の台風19号による被害を受けた川崎市市民ミュージアムの文化財レスキューについて

横浜市歴史博物館　学芸員　橋口　豊

1. はじめに

本稿は令和元年10月に台風被害を受けた川崎市市民ミュージアム（以下、市民ミュージアム）の文化財レスキューに参加した際の所感を記すものです。

被災状況や経緯について、『神奈川県博物館協会会報』第91号や今号に詳細が記されていますが、まずレスキューに至るまで、次にレスキュー初期に参加した考古収蔵庫（第2収蔵庫）での活動について記します。

なお、本文中に過誤がある場合はすべて筆者の責に帰します。

2. レスキューにいたる経緯

令和元年10月12日（土）から13日（日）にかけて日本に上陸した台風19号（ハギビス）は全国にさまざまな被害をもたらしました。

筆者が勤める横浜市歴史博物館（以下、当館）では、隣接する大塚・歳勝土遺跡公園内の大塚遺跡部分について、12日から13日午前中の間施錠をして台風に備えました（当館は8月より工事のため休館中）。

台風一過の13日朝は、普段であれば東海道線と横浜市営地下鉄を乗り継いで通勤していますが、当然ながら在来線がほぼ全面運休でした。横浜市営地下鉄だけは運行していたので何とか通勤を果たしたのち、大塚・歳勝土遺跡公園の被害状況を確認。9月の台風15号に比較して軽微なものであったと記憶しています。

遺跡公園の被害状況を確認後、館内で他の職員と会話をする中でどうにも不穏な話を耳にしました。いわく、「市民ミュージアムが大変らしい」。その話が事実であると判明するのにたいして時間はかかりませんでした。武蔵小杉駅周辺や等々力緑地が冠水していることは多くの人によりTwitterなどSNSで投稿されていたため、すぐに確認できたからです。「等々力緑地内の市民ミュージアムもただでは済まないだろう」、「地階の収蔵庫が心配だ」のような話をしたことを覚えていますが、13日時点ではっきりした状況はわかりませんでした。

この頃は神奈川県博物館協会（以下、県博協）の幹事として微力ながらお手伝いさせていただいておりました。10月18日（金）の新聞報道以降、県博協事務局次長による現地確認の様子など情報共有をさせていただく中で、浸水により地下に設置してあった収蔵庫すべてに被害が及んでいるという状況も見えてきました。その後すぐに市民ミュージアムより県博協に支援要請があったことから、10月末には県博協の総合防災計画にもとづいて加盟館園への救援協力要請があり、当館でも周知と参加の可否確認を行いました。

11月1日（金）に県博協による総合対策本部の第1回会議に出席しました。そこで収蔵庫内部の具体的な状況を初めて目の当たりにし、想像以上の深刻さに言葉を失いました。特に空気環境が大変悪化していることについて危機感を覚えました。その後はレスキューの体制や参加方法とともに、準備する道具や活動の際の注意点について説明を受けました。

3. レスキューへの参加

筆者は諸般の事情で、初期の2回のみレスキューに参加しました。1回目は11月15日（金）、県博協から加盟館への救援協力要請中だったこともあり、緊急レスキューという形で終日、2回目は県博協の要請によるレスキューということで12月20日（金）に半日間です。継続的、複数回の参加はかなわなかったのでレスキューの経過をお示しすることができない点をあらかじめおことわりしておきます。

11月15日（金）は当館より4名、神奈川県立歴史博物館から2名参加しました。

「発掘された日本列島展2018」以来、およそ1年ぶりに訪れた市民ミュージアムはすっかり様変わりしていました。エントランス前の広場は

建設現場で使用される仮囲いに覆われており中が見えず、案内を受けて通用口から入るも物々しい雰囲気に緊張が高まります。受付を済ませ、市民ミュージアムが用意した道具を持って講堂へ。そこで着替えを行いました。作業着やヘルメット、ゴーグルや安全靴は発掘調査や踏査でよく使っていたので慣れたものですが、化学防護服と防塵マスクは初めての経験でした。すべて装着すると、視界が非常に制限されることに加えて息苦しいことこの上なく、隙間の無い恰好になることから、人より少し大きく汗かきの身にとってはストレスフルな環境でした。その後「45分に1回休憩を取りましょう」「無理はしない」などアドバイスを受けて、地下の収蔵庫へ。地上階ですでにカビ臭が漂っており慄きます。

地下へ降りるとたくさんの人が活動されており、県博協以外にも多くの団体がレスキューに参加していることを実感しました。筆者に課せられたミッションは考古収蔵庫内の整理を手伝うことでした。収蔵庫内には電気が通っておらず、白熱灯でごくわずかな範囲のみ照らされていました。身長をゆうに超える濁流が入り込んだことが、壁に残された染みと、収蔵庫内のテンバコと呼ばれる遺物収納ケースになみなみと満たされた水から実感できます。筆者の1日半の活動のほぼすべてはテンバコの排水作業に費やされました。はじめは灯油ポンプで少しずつ汲み出した後、収蔵庫外の電動ポンプで外に排水していましたが、2回目は灯油ポンプが小型電動ポンプに代わり、その後は別の参加者に聞いたところ、テンバコに穴を開けて排水したとのこと。灯油ポンプでの作業は2人1組の作業で1日20ケース程度しか進まなかったためと思われます。

床には様々なものが散乱し、湿気により床板はめくり上がり「釘が露出している場所もあるから気をつけて」と注意を受けました。「破傷風の予防接種は15年以上前に打ってそれっきりだから、誤って釘をひっかけないように気を付けないと」と移動もままならず、収蔵庫内は大量の水分により湿度が常時100%を示すという状況でした。実際最初の45分は暗さと暑さと不快さから何もすることができませんでした。1日半、本当に微力ですがレスキューのお手伝いをさせていただきましたが、資料へのアプローチをほとんど行うことができないまま筆者の活動は終了となりました。

4. おわりに

令和3年現在、市民ミュージアム、川崎市はじめ多くの方の尽力により考古収蔵庫の資料は全て収蔵庫外に出されたと聞きます。この1年はコロナ禍により活動がままならないことも多く感染拡大が止まらない状況ではありますが、今後とも可能な限り文化財レスキューに協力することができればと考えています。